

## 生物進化の哲学と無痛文明

生命の哲学の構築に向けて(13)

森岡正博\*

### 1 はじめに

本論文は、生物進化の哲学の視点から無痛文明の概念に考察を加え、新たな義論の地平を切り開こうとするものである。細部については多くを省略し、全体の構造を明らかにすることを優先する。

「無痛文明」とは、拙著『無痛文明論』(トランスビュー、2003年)によって提唱された概念である。この概念は、哲学、心理学、文化人類学など各方面に影響を与えた。外国語への翻訳もなされており(ハングル版[書籍全体]、英語版[第1章]、トルコ語版[第1章])、今後義論が拡大していくと思われる。『無痛文明論』という書籍は2003年の刊行をもって完結したが、義論そのものが決着したわけではない。私は『無痛文明論』をさらに広く展開する構想を持っており、本論文もその展開部のひとつのパートの草稿として書かれるものである。

### 2 無痛文明と自己家畜化

現代文明は、痛みや苦しみを排除して快や快適さを求めるシステムを、様々な形で社会の隅々にまで張りめぐらせてきた。その文明の流れはとどまるどころを知らず、先進諸国を中心に大きなうねりとなって進んでいる。このような形で進んでいく文明を「無痛文明」と呼ぶ。痛みや苦しみがなくなるのは、一見良いことのように見える。もちろん、人生において出会う耐えがたい痛み(末期がんの苦痛など)がテクノロジーによって回避されるのは悪いことではない。問題はそこではない。問題なのは、我々が将来経験するであろう様々なレベルの痛みが予防的テクノロジーによって次々と人生や社会から抹消されていくような方向へと現代文明が進んでいる点である(予防的無痛化)。なぜなら、痛みや苦しみを予防的に回避することと引き替えにして、我々から「生命のよろこび」が奪われていくからである。「生命のよろこび」とは、我々が自分の枠組みを内的に解体して生まれ変わろうとするときに予測不可能な形で訪れるよろこびの

---

\* 早稲田大学人間科学部教授

電子メール：<http://www.lifestudies.org/jp> の送信フォームより

感覚のことである。このよろこびの感覚は、我々が人生を意味のあるものとして生きていくためにどうしても必要なものなのだが、無痛文明は快と快適さと引き替えにこのよろこびを奪っていくのである。我々はこのことを実はよく知っているのであるが、快と快適さを提供するシステムから離れることができない。この無痛化の流れに逆らおうとする営みもまた、無痛文明を促進する動力として利用される。現代文明はまだ無痛化の途中であるから、我々はあちこちで避けがたい苦しみに出会うが、それらをできるかぎり減らす方向へと現代文明が進んでいることに間違いはない。我々の社会の無痛化はひたひたと進んでおり、その流れを簡単に押し戻すことはできない。世界のいたるところに痛みや苦しみが溢れているのだからそれを消していくことのどこが悪いかと問われて何も反論できないような社会に我々は住んでいる。「無痛化のどこが悪いのか？」と真顔で問うようなところまで社会の無痛化は進んでいるのだ。

無痛化の進んだ社会とは、いわば砂糖の海に溺れていくような社会である。我々には、そこから脱出したいという気持ちはあるものの、我々の「身体の欲望」（後述）はそれを望んでおらず、我々は無痛文明の内側にとどまることを正当化するか、あるいは脱出しようと無駄にもがくだけに終わる。このような状況下において、我々はどのように生きていけばいいのか、無痛化に向き合っていけばいいのかという問いを探求したのが『無痛文明論』であった。無痛文明論の詳しい内容については同書を読んでいただくとして、ここで、無痛文明論を準備したセオリーである自己家畜化論について簡単にまとめておきたい。

「自己家畜化」は、フォン・アイクシュテットらによって1930年代に構想された概念である。人間は文明化のプロセスにおいて動物を家畜化してきたが、それと同時に人間自身をも家畜化してきたというのである。人間が自分自身を家畜化するのであるから、自己家畜化と呼ばれる。この概念は小原秀雄によって拡張された。私は『無痛文明論』第1章においてそれをさらに拡張し、自己家畜化の特徴を次の8個に集約した。

#### 自己家畜化（森岡による拡張）

- (1) 人間は自身を人工環境の元に置いた。
- (2) 食料を自動供給できるシステムを構築した。
- (3) テクノロジーによって自然の脅威を克服してきた。
- (4) 人間の繁殖を管理した。（家族計画や生殖医療など）。
- (5) 人間の品質を改良しようとしてきた。（優生学や近年の生殖技術）。
- (6) 死のコントロール。（予期せぬ死の排除や尊厳死など）。
- (7) 自発的束縛の出現。（快適な現代文明への自発的束縛）。

無痛文明とは、このような自己家畜化の仕組みが社会の隅々にまで張り巡らされ、それへの反抗をすらみずからの動力の一部として取り込んでいくように発展する文明の姿である。この無痛文明を突き動かしているのは、我々自身の内側に存在すると考えられる「身体の欲望」である。それは次の5つの特徴を持っている。

### 身体の欲望

- (1) 快を求め苦痛を避ける
- (2) 現状維持と安定を図る
- (3) すきあらば拡大増殖する
- (4) 他人を犠牲にする
- (5) 人生・生命・自然を管理する

我々の内側に組み込まれた「身体の欲望」が無痛文明を作り上げた。無痛文明は、我々の知らない誰かが作り上げたものではない。それは我々自身が構築してきたものである。この意味で、無痛文明との戦いは身体の欲望との戦いであり、我々自身との戦いである。(それを打破するために「生命の欲望」という概念が導入される。これについては『無痛文明論』第5章を参照)。

それでは、無痛文明はいつから始まったのか。『無痛文明論』では、二つの答えを与えておいた。ひとつは、人類社会の近代化が始まったとき、すなわち科学技術が本格的に展開し、資本主義と産業社会が成立した時期、具体的には19世紀から20世紀にかけて無痛文明ははっきりと姿を現わし、日本を含む先進諸国に広がったという答えである。この考え方によれば、無痛化とは近代化の一種であるということになる。これはこれで説得的な考え方だと思われる。しかしこのように考えると、近代化以前の人類の文明には無痛文明的な側面はなかったことになるわけだが、それは正しいのだろうか。第二の答えは、無痛文明の開始をさらに過去へと遡るものである。すなわち、人類は少なくとも農耕牧畜文明を立ち上げたときに無痛文明への進路を進み始めたとするのである。自然を管理し、現状維持と安定を図ろうとする営みは、農耕牧畜の開始においても見られるはずだからである。

そのように考えていたのであるが、最近、無痛文明の始まりはもっと古いのではないかという発想を抱くようになった。無痛文明の萌芽は、実は人類誕生以前の、地球上の生命の誕生にまで遡るように思い始めたのである。人類誕生以降の文明だけでなく、人類誕生以前の生物進化のプロセスの中に、無痛文明の萌芽が宿っているかもしれないというわけである。これは常軌を逸した発想のように思われるかが、しかしながら、地球における生物進化まで視野を広げたときに

見えてくる重要なポイントもある。この発想の元になったのは、哲学者ハンス・ヨーナス（ヨナスとも表記される）の生物進化の哲学である。

### 3 ハンス・ヨーナスの生物進化の哲学

ヨーナスは1966年に大著『The Phenomenon of Life』を英語で刊行し、その後、1973年に同書のドイツ語版『Organismus und Freiheit』を刊行した（その後同書はDas Prinzip Lebenと改題された）。ドイツ語版では大幅な増補改訂がなされている。細見和之と吉本陵によるドイツ語版からの和訳があるので、以下はその訳書とドイツ語原著にもとづいて簡潔に整理しておく。

ヨーナスは、地球上の40億年の生物進化というものを、自由の拡大を求めて突き進んできた冒険として捉える。その生物進化の最先端に位置し、自由をもっとも広く深く獲得したのが人類である。ヨーロッパ哲学の主流においては、人間と他の動物を分かちものは理性と自由であるとされる。人間には理性と自由が与えられているが、他の動物はそうではないと考えてきたのである。ところがヨーナスはこのような考え方を真っ向から否定する。自由は、生物が40億年前に細胞という形をとって出現したときに、すでに細胞に与えられていたとするのである。もちろんそれは自由の萌芽形態にすぎないが、それが真正な自由であることに間違いはないとヨーナスは言う。細胞の登場によって地上に出現した自由は、生物が進化していくにつれて、次々と新たな段階へと高まっていく。ヨーナスはおおよそ3つの段階でそれを説明している<sup>1</sup>。

自由の第一段階は、上に述べた「細胞の登場」である。

原始地球において原始細胞が誕生した。（もっとも現在の知見では、その構成要素の一部は宇宙から飛来したものである可能性がある）。それは単細胞の細菌のようなものであった。それは細胞膜によって内部と外部が区切られていた。この細胞膜を通して、細胞は外側の栄養分を内側に取り込み、生きるのに必要な物質やエネルギーを産生し、不要になった老廃物を細胞膜の外側へと排出した。これを代謝と呼ぶ。ヨーナスは、細胞に見られる代謝のシステムに生命の始まりを見る。代謝のシステムを詳しく見てみれば、細胞は外部から物質を取り入れ、不要な物質を外部へと出しているわけだが、そのプロセスが進行することで、いずれ細胞を構成する物質それ自体はすべて入れ替わってしまう。しかしながら、構成する物質がすべて入れ替わったとしても、細胞という形式は同一のまま存在を続けるのである。ここにおいて、ある決定的な存在様式が誕生したと考えざるを得ない。ヨーナスはアリストテレスの質料と形相の区分を適用し、物質循環と

---

<sup>1</sup> 以下に述べる生物進化の三段階は森岡がヨーナスの考えを整理しながらまとめたものである。ヨーナス自身は「三段階」という言葉は使っていない。

いう質料の運動によって、細胞という有機体の形相の同一性が保たれるようになったと考えるのである。

構成物質がいくら入れ替わったとしても、細胞という形式は同一のままで存在し続ける。ここで成立する形相としての生命は、それを構成する物質循環の次元から解放されているとヨナスは考える。この解放こそが、細胞という有機体が獲得した「自由」なのである。ヨナスは言う。自由の「最初の一步は、物質交代による、物質との直接的な同一性からの形相の解放 *Emanzipation der Form* だった」<sup>2</sup>。しかし同時に、細胞の生命は、物質循環が絶たれば、そこで消滅してしまう。細胞膜は破裂し、あとに残るのは単なる離散した物質の集合体だけである。この意味で、細胞の生命は物質循環に決定的に依存していると言えることができる。細胞の生命は一面において物質からの解放であると同時に、他方においてその物質に完全に依存しているのである。ヨナスはこのような形で成立する自由を「依存的自由 *bedürftige Freiheit*」と呼ぶ<sup>3</sup>。細胞の生命は、物質循環に依存するはかないものにすぎない。この傷つきやすさ、壊れやすさこそが生命の特徴であると考えられる<sup>4</sup>。ヨナスによる細胞代謝への着目は、同時代の生物学者ルートヴィヒ・フォン・ベルタランフィの有機体の動的平衡モデルから影響を受けたものである。しかしそこに質料と形相の区別を導入し、自由の創発を認めたヨナスの発想はきわめて独創的である。

さて、生物進化における自由の第二段階は「動物の登場」である。

動物は、外界を知覚し、運動し、感情を持つ。動物は植物とは違って、遠く離れた場所にいる餌を捕まえずにはならない。そのためには、遠くにいる餌を知覚し、餌が動く場合にはそれを追跡し、最終的に餌を確保して食べなければならない。これは労苦ではあるが、動物によって始めて獲得された新たな種類の自由である。長い時間をかけて餌を追跡するためには、餌に対する欲求が必要である。すなわち、知覚とは空間的に隔たった対象物への関心であり、欲求とは将来的に獲得すべきもの、言い換えれば時間的に隔たった対象物への関心である。このような隔たりへの関心こそが、動物を動物たらしめるものである<sup>5</sup>。このような関心は、動物に覚醒をもたらす。この覚醒によって動物は「飢餓という苦しみ、恐れという鞭、逃亡の不安な労苦」を知ることになる。これは動物に「快 *Lust*」と「苦 *Leid*」をもたらすのである<sup>6</sup>。無痛文明論の中心概念である快と苦がここに登場していることに着目しておこう。

生物進化における自由の第三段階は「人間の登場」である。ヨナスはここで

<sup>2</sup> ヨナス(2008), p.152./Jonas(1973), S.153.

<sup>3</sup> ヨナス(2008), p.148./Jonas(1973), S.150.

<sup>4</sup> ヨナス(2008), p.188./Jonas(1973), S.183.

<sup>5</sup> ヨナス(2008), pp.191-193./Jonas(1973), S.186-187.

<sup>6</sup> ヨナス(2008), p.198./Jonas(1973), S.192.

「視覚」に注目する。視覚は動物においてすでに獲得されていたものだが、人間はそれを大きく発展させて新たな次元へと引き上げた。

第一に、人間は「予知 **Vorauswissen**」することができるようになった。視覚において把握された動く餌が、このままいったらどこに到達するかを、人間は予測することができ、その予測された場所で待ち構えて餌を捕まえることができる。他の動物もこの能力を持ってはいるが、人間はそれを研ぎ澄ませた<sup>7</sup>。

第二に、人間は自分の意図したとおりに身体を動かす「意図的運動 **Fortbewegung**」の能力を発展させた<sup>8</sup>。ヨーナスはこれを視覚と結びつけているが、他方で、今日で言うエンボディメント的な理解をしていたと考えられる。彼は次のように書いている。「視覚は身体全体の一つの機能であって、その身体は自らの位置と位置の変化を感じ取ることによって自分が環境世界へと動的に組み込まれていることを体験する」<sup>9</sup>。

第三が「抽象化 **Abstraktion**」の能力である<sup>10</sup>。これは質料から形相を区分して知覚する能力であり、これこそが人間を人間たらしめる決定的なものである。この能力によって、人間は、知覚された対象物の像を描くことができるようになった。ヨーナスは、像を描く人という人間の本質を強調するために、「ホモ・ピクトル (**homo pictor** 描く人)」という名称を用いている<sup>11</sup>。この描く行為は、自由な製作である。具体的には、書くことと踊ることにそれが明瞭に現われる。ともに、手を動かして製作する点が重要である。ヨーナスは次のように書く。「一般に手の使用は、想像力によって捉えられた形相 (**Form**) が身体の運動によって置き換えられることをもつとも広範な形で示している。それは、人間によるあらゆる像形成の条件であり、したがってまた、あらゆる技術の条件でもある」<sup>12</sup>。すなわちヨーナスは、抽象的な形相知覚の能力を活用し、手を動かして像を描くという人間の身体制御の行為こそが今日のテクノロジー **Technologie** の原点だと示唆しているのである<sup>13</sup>。これが生物進化における自由の冒険の到達地点である。しかしその到達地点はけっして人類を幸福にするものではなかった。今日、人類は、みずから生み出したテクノロジーによって破滅する危機を背負い込んでいる。この点にヨーナスの技術哲学の根本的な問題意識がある。

---

<sup>7</sup> ヨーナス(2008), p.274./Jonas(1973), S.256.

<sup>8</sup> ヨーナス(2008), p.282./Jonas(1973), S.262.

<sup>9</sup> ヨーナス(2008), p.281./Jonas(1973), S.261. ヨーナスがハイデガーの弟子であったことを考え合わせると興味深い記述である。

<sup>10</sup> ヨーナス(2008), p.303./Jonas(1973), S.281.

<sup>11</sup> ヨーナス(2008), p.309./Jonas(1973), S.286.

<sup>12</sup> ヨーナス(2008), p.310./Jonas(1973), S.287.

<sup>13</sup> ヨーナス(2008), p.313./Jonas(1973), S.296.

## 4 生物進化と無痛文明

以上がヨナサスの生物進化の哲学における自由の冒険の三段階である。これ  
を無痛文明論の視座から吟味してみよう。

第一段階の「細胞の登場」であるが、これは物質代謝によって細胞の形相が維  
持されることを意味している。細胞膜を介した物質代謝が順調に進むかぎり、細  
胞は「現状維持と安定」を確保できる。

第二段階の「動物の登場」であるが、ヨナサスはここにおいて「快」と「苦」  
が誕生すると考える。また動物には「欲望」や「欲求」があるとしている。動物  
は欲望や欲求にもとづいて行動し、快を求め苦を避ける。

第三段階の「人間の登場」であるが、人間は形相を知覚し、手を動かして像を  
描くという身体制御の行為によって、外界や人間自身を思い通りに管理するテ  
クノロジーを獲得していった。また、予知する能力は予防的無痛化を準備するも  
のである。

このような視点から眺めてみると、無痛文明を突き動かしているところの人  
間の「身体の欲望」の2つの側面は、すでに人類が登場する以前から生物に存在  
していたことになる。

### 身体の欲望

- (1) 快を求め苦痛を避ける ←動物の登場
- (2) 現状維持と安定を図る ←細胞の登場
- (3) すきあらば拡大増殖する
- (4) 他人を犠牲にする
- (5) 人生・生命・自然を管理する ←人間の登場

上図で明らかなように、「身体の欲望」の(1)と(2)は、動物および細胞の  
登場の段階において、すでに存在していたのである。無痛文明論を書いていたと  
ときには、人間が作り上げた文明のことしか考えていなかったのも、身体の欲望の  
5つの特徴をすべて人間固有のもののみなしていたが、それは誤りである。すな  
わち、「身体の欲望」は人類の登場によってはじめて地球上に出現したのではな  
く、まず40億年前に原始細胞が登場したときに「現状維持と安定を図る」とい  
う「身体の欲望」の側面が出現し、ついで動物が登場したときに「快を求め苦痛  
を避ける」という「身体の欲望」の側面が出現したのである。そしてそれらが欲  
求や欲望というひとまとまりの形を取り始めたのが動物においてであるという  
のがヨナサスの考え方である。このように、ヨナサスに触発されて視野を広げて  
みれば、「身体の欲望」の展開は人類の文明の歴史においてだけではなく、40

億年の生物進化の全歴史において捉えられなければならないことになる。

ところで、もし地球上の生物進化に即して「身体の欲望」の成立史を考えるならば、ヨナスの三段階論ではまだ足りないと言わざるを得ない。もちろんヨナスは自由の冒険という視点から生物進化を見ようとしたのだから、無痛文明論とは視点が異なっている。しかしながら、本論文の観点からすれば、このヨナスの理論は以下の二つの視点からさらに補われなくてはならない。それは「細胞分裂と増殖」および「細胞の捕食行動」の二つである。

まずは「細胞分裂と増殖」について考えよう。

単細胞生物はそのままの姿でいつまでも生きていくのではない。ある程度時間が経ったらみずから能動的に二つに分裂する。そのときに細胞膜の内側に存在する DNA のセットや細胞質などが、新たな二個の細胞へと受け渡される。こうやって細胞は増殖していく。40億年前に地球上で誕生した原始細菌においてもそうだったはずである。原始細菌は、最初は細胞膜で包まれた一個の細胞として、できるかぎり長く存在を続けようとしていただけだったかもしれない。しかしどこかの時点で二個の細胞に分裂し、増殖するということをはじめたわけである。環境条件がよければ、細胞の分裂は次々と起こり、原始細菌の数はどんどん増えていったはずだ。細胞分裂は、細胞膜で包まれた細胞の誕生に匹敵する大きな出来事である。なぜなら細胞分裂によって、同一の生命が個体の生存限界を超えて生きのび、個体数を増やすということが可能になったからである。

細胞分裂しておけば、分裂後にどちらかの細胞が死んだとしても、他方の系統で同じ生命パターンを生きのびさせることが可能となる。ヨナス的に言えば、細胞分裂とは、たとえ自らが死んだとしても、その同じ形相を他の系統において生きのびさせることである。分裂後の細胞がどんどん増殖すれば、同一の形相が生きのびる確率は高くなる。もし原始細菌に細胞分裂が起きなかったとしたら、地球上に生命は残っていなかっただろう。細胞膜は時間の経過とともに破れてしまい、細胞はただの物質の集合体に戻っていったに違いない。細胞膜で囲われた細胞の登場が生命の第一の重大イベントだとすれば、細胞分裂は生命の第二の重大イベントである。この第二のイベントがなかったなら、原始細菌は細胞膜で囲われた単なる「代謝機械」に終わっていただろう。細胞膜の外側から養分を取り入れ、排泄物を細胞膜の外側に捨てて、自己の形態と機能をただただ維持する自己同一機械でしかなかっただろう。もし仮にその細胞の営みが100万年のあいだずっと続いたとしても、それは同じことを同じ場所で延々と繰り返す代謝機械にすぎず、生命とは呼べないと私は思う。それはちょうど太陽光エネルギーを取り入れて同じ動作をひたすら繰り返す自動人形のようなものではないだろうか。もちろんヨナスの言うように、細胞膜を介した物質代謝が成立するときに形相としての生命が成立すると考えるのは間違いではないかもしれ

ない。しかしながら、それはまだ生命の準備段階にすぎないのであって、それが真正の生命になるためには、やはり分裂と増殖の営みが開始されるまで待たないといけないと私は思うのである。古来より、子孫を残すことが生命の必要条件のひとつであると考えられてきた。そのことの意味を深く再考しなくてはならない。

細胞分裂とは、単に容積が大きくなった細胞が二つの領域に分かれるというだけのことではない。細胞分裂とは、ほぼ同一のゲノムを持った細胞が同時に新たに2個できることであり、それは精密にプログラミングされた能動的なイベントである。原始細菌においてそのような精密なイベントが最初からいきなり成立したとは考えにくい。おそらく多数の細菌群による長期間の試行錯誤ののちに、そのような細胞分裂の基本形式が成立したのであろう。細胞分裂は、生命の本質にかかわる一大事なのである。

次に考えたいのは「細胞の捕食行動」である。

人間や動物は捕食行動をしている。捕食行動はアメーバのような単細胞生物においても見られる。一般に単細胞生物が他の単細胞生物を食べる行動はファゴサイトーシスと呼ばれる。

この行動は生物進化の歴史のどこまで遡れるのだろうか。生物は、細胞膜の内部に核を持つ真核生物と、そのような核の構造を持たない原核生物（真正細菌と古細菌）に分類される。生物進化においては、まず原核生物が登場し、そののちに真核生物が登場した。この真核生物の誕生は、単細胞の原核生物が、他の単細胞の原核生物を捕食することによって起きたとする考え方が有力である（細胞内共生説）。食べられた側の細胞の一部が、捕食側の細胞内に残存して、一種の共生関係に入ったのである。同様の出来事は、単細胞の真核生物がシアノバクテリアを捕食したときにも起きたと考えられている。2019年の筑波大学の研究では、単細胞の原核生物が他の原核生物などを捕食する様子が走査顕微鏡で撮影された<sup>14</sup>。原核生物が、みずからの細胞の表面を凹ませることで他の原核生物を捕食する様子が見られる。これは、生物進化の非常に古い時点で、単細胞の原核生物による捕食が行なわれていた可能性を示唆するものである。いずれにせよ、動物が登場する以前に、単細胞の原核生物や真核生物による捕食行動が起きていたことは間違いないであろう。

以上の二つは、「身体の欲望」にぴったりと当てはまる。すなわち、細胞分裂と増殖の登場によって、すきあらば拡大増殖するという「身体の欲望」が誕生し、細胞の捕食行動の登場によって、他の生物を犠牲にするという「身体の欲望」が誕生したのである。（身体の欲望の（4）は「他人」となっているが、これは「他の生物」と読み替えることにする）。

---

<sup>14</sup> <https://ura.sec.tsukuba.ac.jp/archives/19938> （2022年3月14日閲覧）。

## 身体の欲望

- (1) 快を求め苦痛を避ける ←動物の登場
- (2) 現状維持と安定を図る ←細胞の登場
- (3) すきあらば拡大増殖する ←細胞分裂と増殖の登場
- (4) 他の生物を犠牲にする ←細胞の捕食行動の登場
- (5) 人生・生命・自然を管理する ←人間の登場

このように、身体の欲望の5つの特徴のすべてが、生物進化のどこかの時点で誕生したと考えられる。分かりやすくするために、これを時系列順に並べ替えてみよう。

## 身体の欲望の歴史

- ・細胞の登場 → (2) 現状維持と安定を図る
- ・細胞分裂と増殖の登場 → (3) すきあらば拡大増殖する
- ・細胞の捕食行動の登場 → (4) 他の生物を犠牲にする
- ・動物の登場 → (1) 快を求め苦痛を避ける
- ・人間の登場 → (5) 人生・生命・自然を管理する

ここから分かるのは、無痛文明を基礎づける「身体の欲望」が人類の登場とともに出現したわけではないということである。驚くべきことに、「身体の欲望」の5つの側面のうちの4つまでもが、人類の登場以前に出現しているのである。すなわち、「身体の欲望」は、細胞の登場から人類に至る40億年の生物進化のプロセスのなかで、レンガをひとつひとつ積み上げるようにして組み立てられてきたのであり、人類の登場によって第5の「身体の欲望」の側面が付け加えられ、今日の「身体の欲望」が完成したのである。『無痛文明論』では、無痛文明の圧倒的な強さについてあらゆる角度から考察したが、その強さの根本原因は謎であった。本論文によってその強さの秘密にひとつの仮説が与えられたことになる。すなわち無痛文明は、人類誕生に至るまでの40億年の生物進化によって形成され蓄積された「身体の欲望」に支えられているからこそ、圧倒的な力強さを誇っているのである。『無痛文明論』において私は「無痛文明」と戦うことを提唱してきた。しかしそれは我々の文明へと流れ込んできた生物進化の40億年の蓄積と戦うことだったのである。

『無痛文明論』では、私が「私自身」と戦うことも提唱された。しかしそれは、私自身の中へと流れ込んで私の「身体の欲望」を構成しているところの生物進化の40億年の蓄積と戦うことでもある。生物進化のプロセスで登場した「身

体の欲望」の諸側面を、私という人間個人の身体に投影してみることによって、私が自分自身の欲望と戦うときの手強さの感触に何かの説明を与えることができるかもしれない。

人間の肉体は、無数の多様な細胞からできあがっている。それらの細胞には、生物進化の途上で獲得した「代謝」「分裂と増殖」「捕食行動」が、程度の差こそあれ刻み込まれている。肉体を構成するすべての細胞は代謝を行なって自己を維持している。細胞は分裂して新しくなり、古い細胞は死滅して排泄される。バランスを欠いた細胞の増殖は抑えられているが、そのバランスが破れたときにはがん細胞のように増殖する。免疫細胞には捕食行動を行なうものがある。人間の肉体を構成する細胞のこれらのふるまいが、人間個体レベルの「身体の欲望」（たとえば他人を犠牲にしてまでも自己利益を得たいとする欲望）と直接に結びついているとは考えられない。しかしながら、それらの傾向を持った細胞が多数集まり、複雑な構造を作り上げて人間が生まれたのだから、細胞レベルで発揮される3つの「身体の欲望」の側面が人間の肉体に深く刻み込まれていて、人間の行動に何かの影響を与えるという事はあり得るのかもしれない。人間は細胞から進化してきた、細胞的存在なのである。人間が動物的存在であるということはよく語られるが、細胞的存在であるということはあまり話題にならない。だが無痛文明論においては、痛みを避け快を求める動物的存在としての人間の本質をどうしていけばいいのかが問われるだけでなく、現状維持と安定を求め、すきあらば他者を押しつけて増殖し、他者を捕食しようとする細胞的存在としての人間の本質をどうしていけばいいのかもまた問われるのである。

私はいま「身体の欲望」を二つの仕方でも語った。ひとつは、生物進化の歴史の上に「身体の欲望」の5つの側面の登場の時点プロットするような語り方であり、もうひとつは私という人間個人の内側に細胞および動物の「身体の欲望」を見て取るような語り方である。「身体の欲望」のストレートな解釈は前者であるが、後者のような投影も無痛文明を考えるうえで意味を持つと考えたい。

これまでの考察で分かったように、人間に見られる「身体の欲望」の様々な特徴は、人間が独自に作り上げたものではない。それらの「身体の欲望」の4つの側面は人間が登場するはるか以前から生物進化のプロセスで積み上げられてきたのであり、人間の登場によってそれらが「身体の欲望」の第5の側面、すなわち人生・生命・自然を管理したいという欲望によってひとつにまとめ上げられて完成形に至り、無痛文明が立ち上がった。

このように考えることで、「無痛文明」と「身体の欲望」の違いについても新たな光を当てることができるようになる。「無痛文明」を突き動かしているのは「身体の欲望」である。しかし、細菌や動物の世界には「無痛文明」は存在しない。彼らの世界にも「身体の欲望」のいくつかの側面ははっきりと存在している

が、それが「無痛文明」を起動することはない。「無痛文明」を立ち上げたのは人類だけである。本論文第2章で私は「人類誕生以前の生物進化のプロセスの中に、無痛文明の萌芽が宿っている」のではないかと書いた。しかしそれは間違っている。人類誕生以前の生物進化のプロセスの中に出現しているのは、無痛文明の萌芽ではなく、「身体の欲望」の諸側面である。無痛文明は人類とともに立ち上がったとするのが正しい。

このことを念頭に置いたうえで、無痛文明はいつ始まったのかという当初の問いに戻ろう。すると、無痛文明は、人類が人生・生命・自然を管理するテクノロジーを考案ときに開始されたと言うことができる。人生・生命・自然を管理するテクノロジーとは、人生・生命・自然が進んでいくべき好ましい道筋をあらかじめ設定したうえで、それらが実際にその道筋を進むように追い込んでいくテクノロジーのことである。これは単なる個人技としてではなく、集合的な人間によって運営され、また世代を超えて受け継がれていくという特徴を持っている。そしてテクノロジーが社会に根付いたとき、それは社会に生きる人間たちの知覚や行動パターンに逆に影響を与え始める。個人技とテクノロジーの違いはここにある。テクノロジーは時間と空間を超えて拡張し、それを生み出した人間や社会のあり方それ自体をも変容させていくのである。人類が最初に手にしたテクノロジーは、おそらく河川の改修と水流の管理、欲しい食用植物だけを選択的に育てて収穫する農耕、動物の生殖の管理による畜産などであったと考えられる。したがって、人類が治水・農耕・畜産を始めたときに、無痛文明の原初的な形式が立ち上がったと推測できる。もちろん人類は石器などの道具を発明し、高度な知性でもって複雑な狩猟採集の社会を構築していた。しかしそれが無痛文明の形式にまで至ることはなかったのではないか<sup>15</sup>。

以上の考察は、「人間を人間たらしめるものは何か？」という哲学の根本問題に新たな答えを与えるものとなるかもしれない。古代ギリシア以来の西洋哲学の主流においては、人間を人間たらしめるもの、すなわち人間を動物から分かつものは理性であり自由であると考えられてきた<sup>16</sup>。しかし、無痛文明論の視座からすれば、人間を人間たらしめているものは無痛文明であるということになるだろう。細かく見てみれば、無痛文明を立ち上げる直接の原動力である第5番目の「身体の欲望」、すなわち人生・生命・自然を管理したいという欲望およびそれを可能にするテクノロジーこそが、人間を人間たらしめているものだという

<sup>15</sup> 現代まで続いている狩猟採集民は、この意味で無痛文明への道を本格的には辿らなかった人々であると言えるのかもしれない。この点は研究が必要である。

<sup>16</sup> もちろん非西洋哲学においてはかならずしもそうではない。たとえば古代インド哲学においては、有情の輪廻を前提とするので、人間と動物の存在論的境界線はさほどクリアーには引かれない。差異があるとすれば、それは人間のみが解脱することができるという点に求められることになると思われる。

ことになるはずだ。もちろん理性や自由を人間は最大に展開したと言えるが、しかし理性能力は広く動物世界に見られるものであり（近年の研究は様々な動物の高度な理性能力を発見してきている）、さらにヨナスによれば自由は原始細胞の時点から存在していたというわけである。これをもう一歩進めて言えば、40億年の生物進化において徐々に形成されてきた「身体の欲望」を、人生・生命・自然を管理するコントロール理性によってひとつにまとめあげ、それを無痛文明という巨大な潮流へと変容させた能力こそが、人間を人間たらしめているものであると考えられる。理性があるかないかで人間と動物が分かれるのではなく、理性によって「身体の欲望」をひとつにまとめあげることに成功したかどうかで人間と動物が分かれるのである。生物進化の出発点から積み上がってきたものを、理性によって無痛文明というまとまりへと引き上げていくダイナミックな能力こそが、人間を人間たらしめているものである<sup>17</sup>。この意味で、無痛文明こそが人間の可能性の根源であり、生物進化における人間の特異な位置である。これは「人間とは何か？」という問いへの新たな答えとなるだろう。そして、人間によってのみ可能となった無痛文明こそが、1万年の人類の文明史の帰結として人間から「生命のよろこび」を奪い去り、人間たちを無自覚な生ける屍へと追い込もうとしているというのが「無痛文明論」の主張なのである。以上が、生物進化の哲学と無痛文明についての私の見解である。

ところで、生物の細胞に着目して思索を進めた哲学者として、ヨナスのほかにフロイトとバタイユがいる。ここで彼らの義論を簡単に見ておきたい。

フロイトは論文『快感原則の彼岸』において、地球上における生命の誕生について思索している。すなわち、ある時点の地球において「生命のない物質の中に生命の特性が芽生えた」<sup>18</sup>。ところが、その生命の萌芽には「生命のない状態に回帰しようとする欲動」があり、その欲動が発揮されることによって「長い期間にわたって、生命のある物質が絶えず新たに作り出され、簡単に死んでいった」<sup>19</sup>。つまり、原初の生命は、誕生したらすぐにみずからの欲動によって死んでいったとフロイトは考える。ここに見られる欲動が「死の欲動」である。しかしあるときついに、原初の生命は「原初の生命の経路から大きく逸脱し、複雑な迂回路を経由して、最後に死という目標に到達するようになった」<sup>20</sup>。ここに、「死の

---

<sup>17</sup> もし狩猟採集社会が無痛文明を発展させなかったのだとしたら、そこに生きる人間たちは人間ではなかったことになるのだろうか。かならずしもそうはならない。彼らは脳機能などの次元において無痛文明を発展させる能力それ自体を持ってはいたものの、それを実際には発展させなかったのである。カテゴリーカルには人間であるが、実際には無痛文明の担い手になることをしなかったのである。この点についても詳しい考察が必要である。また、狩猟採集社会のほうが良い社会であったという考え方についても検討する必要がある。

<sup>18</sup> フロイト(1996), p.162./Freud(1925), S.228.

<sup>19</sup> フロイト(1996), pp.162-163./Freud(1925), S.228.

<sup>20</sup> フロイト(1996), p.163./Freud(1925), S.228-229.

欲動 Todestrieb」に抵抗して、できるだけ長生きしてから死にたいとする新たな欲動が生じたのである。フロイトはこれを「生の欲動 *Lebenstrieb*」と呼ぶ<sup>21</sup>。フロイトは次のように書いている。「一群の欲動 [森岡註：死の欲動] が前方に進み、生命の目標をできるだけ早く達成しようとする。そして他の一群の欲動 [森岡註：生の欲動] は、この経路のある地点から戻り、一定の地点から再び道をたどり直し、死までの経路を延長しようとする」<sup>22</sup>。この論文では、フロイトが具体的に生物進化のどの時点を指して議論しているのか判然とはしない。我々の視点から解釈してみれば、生命が絶えず新たに作り出され、簡単に死んでいったという段階は、細胞膜によって区切られた原始細胞の登場のことを意味していると見ることができる。すなわち、細胞単体としての代謝は成立しているが、何かの要因で代謝が停止すれば、細胞は解体してもとの物質に戻るのである。次の段階で起きたとされる、原初の生命の経路から大きく逸脱し複雑な迂回路を経由するという出来事は、原始細胞の細胞分裂と増殖を意味していると見ることができる。細胞分裂をすることによって、細胞は死に抵抗し、できるだけ長くその形相を生きのびさせようとしたのである。フロイトはこれを「性」と捉えているが、生物進化において性（有性生殖）が登場したのはかなり後のことであるので、細胞分裂に性を見ようとするフロイトの考え方は間違っていると言わざるを得ない。それにもかかわらず、細胞分裂と増殖という出来事の登場に大きな哲学的意味を見出した点において、フロイトの学説は高く評価されるべきである。そしてフロイトの視点からすれば、人間における神経症の発端は、生まれてすぐに死のうとする細胞の欲動に逆らって、細胞が分裂と増殖を始めたその瞬間に見定めることができるということになるであろう。ショーペンハウアーの誕生否定（反出生主義）がフロイトに影響していることについては拙著『生まれてこないほうが良かったのか？』で指摘した<sup>23</sup>。以上のフロイトの考え方は、「身体の欲望」論に深く関わるものである。

バタイユは1957年に、主著のひとつである『エロティシズム』を刊行する。これは肉体と心情と聖性におけるエロティシズムについて思索したものであり、フロイトからの影響も見られる。バタイユはエロティシズム *erotisme* を説明するための準備として単細胞生物の分裂について語っているので、その箇所を見ておきたい<sup>24</sup>。1個の細胞が分裂して新たな細胞が2個生まれるわけだが、新しく生まれた二つの細胞は最初の細胞と同一ではないとバタイユは考える。分裂前の細胞は、分裂が終わったときに死ぬのであり、その死と引き替えに二つ

<sup>21</sup> フロイト(1996), p.183./Freud(1925), S.245.

<sup>22</sup> フロイト(1996), p.166./Freud(1925), S.231.

<sup>23</sup> 森岡(2020) 第3章。

<sup>24</sup> バタイユが同書で細胞分裂について語っていることをご教示くださった福島勲氏に感謝したい。

の細胞が新たに生まれるのである。ところで、細胞が分裂している途中の状態は非常に不思議な存在様態をしている。まず、分裂している途中において、最初の細胞は、新しく生まれる二つの細胞と連続していると考えられる。しかし分裂が終了すれば、新しくできた2個の細胞は互いに不連続的な存在になる。もっと詳しく見ると、まず分裂前の細胞は、他から切り離されて独立した不連続的な存在である。ところが分裂が始まると、分裂前の細胞は新たにできはじめた2個の細胞と連続的につながって存在するとも言えるし、新たな2個の細胞へと溶け込んでいくようにも見える。バタイユはこれを「宙吊りの未決定の瞬間 *un moment suspendu*」と呼んでいる<sup>25</sup>。分裂が完了すれば分裂前の細胞は消滅し、新たな不連続的な2個の細胞が出現する。細胞分裂のプロセスにおいて、不連続性→連続性→不連続性、という存在様態の変化が起きるのである。そしてこれは人間の精神にも影響を及ぼしているとバタイユは考える。人間にはこの「失われた連続性へのノスタルジー *la nostalgie de la continuité perdu*」があり、それが原因となってエロティシズムが生じるというのである<sup>26</sup>。

バタイユが言うには、生きている細胞にはエネルギーがどんどん充溢していく。そこにあるのは「過剰 *surabondance*」である。エネルギーが蓄積された細胞は、「安らかな平静さから荒々しい動揺の状態」へと移っていき、「分離の暴力 *la violence de la séparation*」を呼びさまし、細胞は二つに分裂する。この分離の暴力によって、最初の細胞は死に、新しい細胞が生まれる<sup>27</sup>。細胞分裂こそが分裂前の細胞にとっての「死」であるというバタイユの見解は重要である<sup>28</sup>。

フロイトと対比させてみよう。フロイトは細胞が「死の欲動」によって無に帰ることを細胞の死だと考えた。これに対してバタイユは、細胞がエネルギーの充溢によって細胞分裂するとき、分裂前の細胞における死が起きると考えた。もちろん細胞が事故によって死ぬことは当然あるのだが、それだけではなくて、細胞が内的な必然性によってみずから死を前向きに選び取ることがあるというふうにフロイトもバタイユも考えているのである。しかし、死の内実については、上に述べたように、彼らはまったく異なった捉え方をしている。

バタイユによれば、細胞分裂の途中で成立する連続性というものへのノスタルジーが人間の精神に埋め込まれていて、それがエロティシズムを生み出す原点となる。また細胞分裂によって最初の細胞は死ぬのであり、エロティシズムがつねに死と結びつく理由もここから来ているとバタイユは示唆する。いずれにせよ、バタイユが細胞分裂という出来事にフロイトとは異なった意味を見出し

<sup>25</sup> バタイユ(1957), p.160./Bataille(1957), p.97.

<sup>26</sup> バタイユ(1957), pp.21-25./Bataille(1957), p.19-21.

<sup>27</sup> バタイユ(1957), pp.160-162./Bataille(1957), p.97-98.

<sup>28</sup> もちろん現代の生物学はこのようには考えない。分裂によって最初の細胞は複製され生きのびると考える。

たのは画期的なことである。そして私はさらに彼らとは異なり、細胞分裂に無痛文明の礎石となる「身体の欲望」のひとつの側面を見て取るのである。

ところでバタイユは、性愛行為において人間は融合状態という連続性の中へと自分を消し去っていくのだと言う。もちろん実際に融合することはできないのだが、エロティシズムとはそのような自己の消滅への投企である。「エロティシズムのなかで作用しているのは、つねに、確固とした形態の溶解ということなのだ。繰り返しておけば、確固とした形態とは、社会的で規則正しい生の形態を指す」とバタイユは書く<sup>29</sup>。このような溶解と自己喪失を核心とするバタイユのエロティシズム論は、現状維持と安定を図ることを死守する「身体の欲望」とは正反対の方向を向いており、この点で無痛文明論と軌を一にする。実際、無痛文明論は、無痛文明のなかで真のエロスが消されていくと主張するものであり、それへの対抗原理として「生命の欲望」の概念が提唱された。この「生命の欲望」はバタイユの言うエロティシズムと通底するものを持っている。この点の解明については将来の課題としたい。

以上、生物進化の哲学と無痛文明に関する新たな発想のラフスケッチを行なった。『無痛文明論』を刊行してから20年が経った。その基本的な主張を変えする必要はないが、その後の思索の展開をそろそろまとめるべき時期に来ていると私は考えている。本論文はそのためのひとつのステップとなるであろう。

## 文献一覧

- バタイユ、ジョルジュ (2004) 『エロティシズム』ちくま学芸文庫、酒井健訳  
(Georges Bataille (1957). *L'Érotisme*. <Œuvre Complète 10. Gallimard, 1987>.)  
フロイト、ジークムント (1996) 「快感原則の彼岸」『自我論集』ちくま学芸文  
庫、竹田青嗣編・中山元訳 (Sigmund Freud (1925). *Jenseits des Lustprinzips*.  
<Gesammelte Schriften 6. Internationaler Psychoanalytischer Verlag>.)  
森岡正博 (2003) 『無痛文明論』トランスビュー  
ヨナーナス、ハンス (2008) 『生命の哲学—有機体と自由』法政大学出版局、細見  
和之・吉本陵訳 (Hans Jonas (1973). *Das Prinzip Leben*. Suhrkamp.)

---

<sup>29</sup> バタイユ(1957), p.30./Bataille(1957), p.24.